

細胞免疫と結核菌

https://l-hospitalier.github.io

2018.5

【自然免疫】は本来哺乳類には存在しないはずの分子配列(カビの β D グルカンなど)、病原体関連分子パターン(pathogen-associated molecular patterns, PAMPS)を認識して自己と非自己を識別、ナチュラル・キラー(NK)細胞を活性化して非自己を排除。 【適応免疫】 骨髄系免疫細胞 は顆粒球、単球(monocyte)の成熟型のマクロファージ、樹状細胞の3種の貪食細胞がある。



NK 細胞

①顆粒球は好中球、好酸球、好塩基球の白血球。 ②マクロファージ(単球)は血管内と組織中で寿命は数か月。 顆粒球は短命で血管内で約 10 時間、組織中で数日。 ③樹状細胞は抗原を貪食し不活性 T リンパ球に提示して活性化させる抗原提示細胞(antigenpresenting cell)として働く。 <u>リンパ系免疫細胞</u>は小型の適応免疫系の <u>④抗原特異的リンパ球と大型の自然免疫</u>系の <u>BNK 細胞(natural killer cell)で腫瘍細胞やヘルペスに感染した細胞を殺す作用をする。 <u>④抗原特異的リンパ球</u>は感染がない状態では小型で不</u>

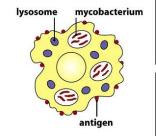
活性。 **B cell と T cell** があり<u>ナイーブリンパ球</u>と呼ぶ。 活性化型は<u>エフェクターリンパ球</u>。 **B cell** 表面の **BCR**(**B cell receptor**) に抗原が結合するとリンパ球は増殖、<mark>形質細胞</mark>(plasma cell) に分化して抗体を

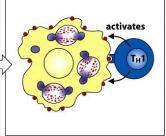
マクロファージ:病原体を 捕食するため細胞体を突 起状に伸長させている。

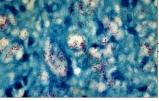
産生。 B cell 由来の液性 Ig(免疫グロブリン、immunoglobulin)の分泌型抗体と T cell 細胞膜上の表面免疫グロブリン (surface immunoglobulin 受容器、T cell receptor , TCR) は関連があるが構造と抗原認識特性は明らかに異なる。 T cell は活性化されると急速 に増殖し、異なった4種の特性を持つエフェクターT cell に分化。 ①細胞障害性 T細 **胞**は **CD8***1 抗原を細胞表面に発現、末梢の **T cell** の **1/3** を占める。 MHC I 分子の側面 に結合、補助レセプターとして働き、細胞内で合成されたウイルス抗原などを認識、細 胞障害性T細胞(キラーT細胞)へ分化(MHCⅡを認識する CD4 発現細胞もある)。 キラーT 細胞は標的細胞膜の透過性亢進と核 DNA の断片化を伴うアポトーシス(プロ グラムされた細胞死)を誘導。②ヘルパーT細胞はCD4抗原をもち $T_{H}1$ と $T_{H}2$ があり、 刺激された B cell を補助的に刺激し、マクロファージを活性化する。 ③制御性T細胞 は他のリンパ球の活性化を抑制、サイトカインストームや毒素性ショック症候群を予防。 ④一部は記憶細胞(memory cell)に分化し長期に持続する免疫を担い、特異抗原に再 暴露した場合に速やかにエフェクター細胞に分化する。 B及びTリンパ球はいずれも 骨髄に由来するが、骨髄で成熟するのは B cell のみ (B は bone marrow=骨髄ではなく 鳥のファブリキウス嚢; Bursa of Fabricius に由来)。 T cell は胸腺(Thymus)に遊走 し、そこで成熟。 両リンパ球は成熟すると胸管を経て循環血中に入り、末梢リンパ組 織を循環する。 末梢リンパ組織はリンパ節、脾臓、腸管、扁桃、パイエル板、虫垂な

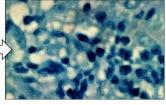
ど。【結核菌】結核菌は表面にミコール酸という脂質を持ち乾燥に安定、マクロファージに貪食されても自分が占拠した小胞がリソゾーム(強酸性で加水分解酵素を持つ)と結合するのを妨げ、小胞内で生存、増殖できる(図左上)*2。図左下には組織内に抗酸菌染色した結核菌が見える。

CD4抗原を持つヘルパーT細胞のT_H1細胞が結核に感染したマクロファージを認識して結合、これを活性化するとリソゾームが小胞と接合(図右上)、結核菌は分解されて消失する(図右下)。









^{*1}CD, Cluster of Differentiation:同一の細胞表面の分子を同定するためのモノクローナル抗体を分類、グループ化したもの。 ^{*2} Janeway's 「免疫生物学」p31

#141